

学習支援会部会（ワークショップ）

日時：2019年

8月29日（水）16:05-17:35

会場：第2会場（23-214教室）

学生スタッフによる学習支援の研究方法

（ワークショップを通じたデータ分析）

プログラム

司会：石毛 弓（大手前大学）

1. 趣旨説明

授業内外で学修（習）支援を行うスタッフとして、学生が雇用される機会が多くある。ティーチング・アシスタントやチューター、ピア・サポーターなど教育機関や役割によってその呼称はさまざまだが、本ワークショップでは一括してTAと呼ぶ。TAは、支援が必要な学生をおなじ学生という目線から手助けする存在として活躍が期待される。TAが効果的に活動するためには、その育成や教育効果の検証をするべきだろう。この問題意識から、「言語データを用いたTA研究の計画を考える」ことを目的として、本ワークショップを開催する。

ワークショップは、事前準備と当日のグループワークの二段階を予定している。まず、話題提供者による参考文献を事前に公開する。参加者は参考文献を読み、検証したい学修（習）支援関連のデータ（もしくは今後取得したいデータ案でもよい）を持ち寄ることが推奨される。ワークショップ当日は、話題提供者による講演を行ったあと、グループワークのかたちでデータを検証する。もちろん、データがない場合や参考文献に目を通していなくても企画への参加は歓迎される。その際でも、TA研究に関する知見が得られることが期待される。参加者が今後の実践につなげられるような成果物を持ち帰ることが、今回の企画のねらいとなる。

2. ワorkshop概要

- | | |
|--------------------------------|-------------|
| ①本企画の趣旨説明 | 石毛 弓（大手前大学） |
| ②「TAによる学習支援を研究する（言語データの収集と分析）」 | 椿本 弥生（東京大学） |
| ③質疑応答 | 椿本 弥生（東京大学） |
| ④グループワーク | 企画参加者 |

TAによる学習支援を研究する （言語データの収集と分析）

椿本 弥生^A

1 高等教育における学習支援研究の必要性

TA（ティーチング・アシスタント）に関する研究を行う必要がある。高等教育の質保証のための1つの方策として、TAの育成と活用が求められている。そのためには、TAの育成方法の開発および、TAによる教育効果の測定・評価が必要である。

TA研究では、TAや支援を受けた学生から得られる言語データを収集し分析するとよい。TAの仕事には、学生との言語コミュニケーションが深く関わるからである。言語データとは、話し言葉や書き言葉のデータである。例えばTAの授業内での発話や記録日誌などがあてはまる。しかし、言語データの活用方法に悩んでいる方は多いのではないだろうか。

そこで今回のワークショップでは、言語データを数的に分析する手法である量的内容分析の方法を学ぶ。それをふまえて、言語データを用いたTA研究の計画を考えることをワークショップの目的とする。

2 量的内容分析とは

量的内容分析の流れ

量的内容分析では、見たままに理解できる（what you see is what you get）記述を数量に変換し、データを量的に取り扱う（リフら 2018）。分析のためのソフトウェアや方法は多く存在するが（例えば、樋口（2014）によるKH Coder）、ここでは分析の基本的な流れを示しておく。詳細は参考文献にて補足する。

- ① 仮説の設定
- ② サンプルングとデータの準備
- ③ 前処理
- ④ 形態素解析・構文解析
- ⑤ データ抽出
- ⑥ 分析と可視化

⑦ 信頼性と妥当性の検証

量的内容分析でできること

心理統計と同じく、量的内容分析においても変数間の関係や差を検討することができる。例えばTAの経験年数を独立変数、自由記述内の出現単語数を従属変数とした場合、経験年数ごとに特定の単語の出現数がどのように変化したかや、単語間の共起関係があるかなどを検討することができる。さらに、量的内容分析と質問紙調査などを組み合わせて分析することもできる。なお、これらの分析には使い慣れた統計ソフトウェアを使える場合がある。

3 ワークショップの形式・内容・対象者

ワークショップは反転形式で行う。当日までに、事前に配布する参考文献にお目通しいただきたい。また、事前アンケートにご協力をお願いしたい。

当日は、参加者自身が持っている（または、これから取得したいと考えている）学習支援に関するデータ（特に言語データ）を持ち寄り、グループワークで互いの研究計画をブラッシュアップする。最後は、成果物として各自の研究計画案を持ち帰ってもらう。

ワークショップの主な対象者は、高等教育機関で学習支援に関わっている教職員（例えば、ラーニングセンターの評価やTA育成の担当者など）である。しかし、これから関わるかもしれない方や、関わっていてすでに研究を開始しているが他の視点から意見がほしい、量的内容分析を導入してみたい、といった方の参加も歓迎する。

参考文献

- 1) ダニエル・リフ、スティーヴン・レイシー、フレデリク・フィコ（2018）内容分析の進め方。勁草書房
- 2) 樋口耕一（2014）社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—。ナカニシヤ出版

A: 東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部附属
教養教育高度化機構